

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

吉富朝子



学位申請者 王睿琪

論文名 非対面聴解における問題処理のストラテジー

【審査結果】

吉富朝子を主査とし、副査として研究指導委員会より海野多枝（主任指導教員）、川口裕司、さらに藤森弘子、阿部新の計5名によって構成された審査委員会は、2020年3月26日に上記論文の審査ならびに口述による最終試験を行った。その結果、審査委員会は全員一致で、申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。

【論文の概要】

本研究のねらいは、台湾の大学で日本語を学ぶ学習者を対象に、非対面聴解における聴解ストラテジーの使用に焦点を当て、聴解の問題解決における理解構築過程の実態を聴解活動の時間軸に沿って調査した上で、熟達した聴き手と未熟な聴き手の間の相違点を明らかにすることにある。調査では、語彙難易度、発話速度、長さが同程度のテキストタイプが異なる物語文2編と説明文2編の実験教材を用い、56名のJFL（Japanese as Second Language）学習者を対象として質問紙調査と再話・回想インタビューを実施し、意識的使用と使用実態の二つの観点から非対面聴解における問題処理のストラテジーを考察している。本調査に至る前に、申請者は4つの準備的調査（質問紙調査、再話・回想インタビュー調査）を行い、それぞれにおいて、聴解ストラテジーの意識的使用、ストラテジーの連鎖、理解構築過程、再話課題の有効性の4つの課題を慎重に吟味し、その考察の上で再話・回想インタビューを用いた本調査の実施に及んでいる。特に熟達者と未熟者の聴解ストラテジー問題処理における理解構築過程を詳細に記述し、音声の聴取から問題箇所範囲・モニター範囲・問題解決の方略の選択・理解の結果に至るまでの過程を包括的に分析している。論文は、全7章により構成され、文字化資料集を伴う。総ページ数は本文443ページ、資料集542ページである。

以下、論文の構成に従い、章ごとに論述内容の概要を示す。

第1章では、本研究を実施した背景に触れながら、研究の目的と意義について述べている。本研究は、熟達した聴き手と未熟な聴き手の間にある相違点を明らかにした上で、以下の

3つの課題を取り上げて考察している。

課題Ⅰ：「聴解ストラテジーの意識的使用に対し、熟達した聴き手と未熟な聴き手の間に差異は見られるか。差異が見られる場合、どこが異なるのか」

課題Ⅱ：「聴解活動における聴解ストラテジーの使用実態に対し、熟達した聴き手と未熟な聴き手の間に差異は見られるか。差異が見られる場合、どこが異なるのか」

課題Ⅲ：「問題処理の理解構築過程において熟達した聴き手と未熟な聴き手の間に差異は見られるか。差異が見られる場合、どこが異なるのか」

なお、上記の三つの課題を明らかにする前に、聴解の理解度テストと再話課題の再生文を検討しながら、「再話課題の有効性」を検証しているため、以下の4つの副課題が設けられている。

課題ⅰ：「再話課題は聴解力を測定できるか」

課題ⅱ：「テキストタイプによって再生率が異なるか」

課題ⅲ：「再生言語によって再生率が異なるか」

課題ⅳ：「再生困難な箇所は何か」

第2章は、本研究に関連する先行研究をふまえている。まず、学習ストラテジーの定義及びその代表的な分類、学習ストラテジーに関する研究を押さえた上で、聴解の理解プロセスに近接する分野である読解に関する先行研究を概観している。読解に関する研究としては、「Kintsch (1998) の心的表象の構築展開過程モデル」と「Levelt (1989) の発話処理モデル」をふまえ、その後読解ストラテジーに関する研究を概観している。さらに、「聴覚的言語処理」、「聴解ストラテジー使用実態・意識的使用・指導など」、「聴解ストラテジー連鎖」、「聴解理解構築過程」、「聴解力と再話力」の順に聴解ストラテジーに関する研究をそれぞれ検討している。

第3章では、本調査に至るまでの4つの研究に関する説明、および本調査のデザインを述べている。4つの研究に関しては、「聴解ストラテジーの意識的使用に関する研究」、「聴解ストラテジー連鎖的使用に関する研究」、「理解構築過程に関する研究」、「再話課題に関する研究」の順に説明を行った。これらの研究結果と残された課題を踏まえた上で、本研究の研究方法、調査対象者、実験教材、分析単位、評価尺度、分析項目を設定し、本研究のデザインを述べている。

第4章は、「実験用聴解教材」、「実験用聴解テスト」、「聴解ストラテジーの調査票」、「聴解ストラテジーの定義と分類」、「文字化と聴解ストラテジー抽出の手順」、「アイディアユニットの分割と採点尺度」、「調査対象、調査期間と実験手順」、の順に本研究の実験概要の詳細な記述である。4.1では、実験用聴解教材の選定基準（発話速度、語彙の

豊富さ、語彙難易度)の設定と、教材の選定についての記述である。4.2では、聴解テストの質問形式の検討と、実験用聴解テストの質問形式と質問内容等を述べている。4.3では、聴解ストラテジーの意識的使用を調査するために、聴解ストラテジーの調査票を提示し、調査票の項目、構成と評価方法を説明している。4.4では、本研究の聴解ストラテジーの分類及び定義を示し、プロトコルデータから抽出した聴解ストラテジーの例を挙げている。4.5では、文字化の手順と聴解ストラテジー抽出の手順を紹介している。4.6では、実験教材のアイディアユニットの分割の基準とプロトコルデータの採点尺度について説明している。4.7では、本研究及び予備調査の調査対象と調査期間、そして、実験手順を述べている。

第5章では、本調査を二つの段階に分けて、分析を行っている。第一段階では、56名のJFL学習者を対象に、「聴解ストラテジーの意識的使用」、「聴解テストの正答率」、「再生文の再生率」、「正答率と再生率の相関」、「聴解ストラテジーの使用実態」と「高低再生群IU(IU: アイディアユニット)」の6項目に沿って分析を行っている。第二段階では、56名のJFL学習者の再生率の違いからクラスター分析によって熟達した聴き手と未熟な聴き手を選び出し、「熟達度」が異なる学習者の相違点を分析した。「聴解ストラテジーの意識的使用」、「聴解ストラテジーの使用実態」と「理解構築過程」の3項目に着目して、熟達した聴き手と未熟な聴き手の間の相違点を分析している。

第6章では、非対面聴解における問題処理のストラテジーの使用実態について、意識と使用実態の双方の面を通じて包括的に分析している。特に問題処理における理解構築過程に焦点を当て、音声の聴取をした後、問題箇所範囲、モニター範囲、聴解ストラテジーの使用、聴解の結果に至るまでの過程を考察し、モデル化している。

第7章では、本研究の結論、および今後の課題と展望について述べられている。第一段階の調査では、プロトコルデータから5250件の聴解ストラテジーが抽出され、Oxford(1990)の学習ストラテジーの分類に基づき、王(2011, 2015, 2017)を参考にしながら、それぞれに分類を行った結果、40項目の聴解ストラテジーが観察された。また、「再話力と聴解力」、「再生率と再話言語」、「再生率とテキストタイプ」、「再生困難な箇所」の側面からも再話課題の有効性を考察している。第二段階の調査では、56名のJFL学習者から熟達した聴き手と未熟な聴き手の28名を選出し分析を行った結果として、聴解ストラテジーの意識的使用の相違点を明らかにしている。また、彼らのプロトコルデータから「問題箇所範囲」、「モニター範囲」の相違点を明らかにした上で、741件の「ストラテジー連鎖」を観察し、その中に4つの類型、31パターンを見出している。さらに、問題処理における理解構築過程のモデルを作成し、音声の聴取から理解に至るまでの過程を可視化している。

以上をふまえ、本研究の研究設問に対する結論は、以下のようにまとめられる。

「熟達した聴き手と未熟な聴き手の相違点」についての3つの研究課題の結論は以下の通りである。

課題Ⅰ：「意識的使用の相違点」では、熟達した聴き手と未熟な聴き手は、①自ら情報量が選択・制御できる電子機器を通じて日本語に触れることを好むものの、積極的に談話ができる場面、つまりネイティブと接触する場面は好まない、②主な推測の手がかりは単語、文脈、背景知識である、③視覚情報等を積極的に使う、の3点に対する意識が共通して高い。一方で、相違点として、①熟達した聴き手は母語話者に近い言語行動をとるように努力する意識が高く、また、単語、接続詞、文法や表現等、ミクロな箇所の理解や記憶に深く注意を払わないことに対する意識も高い。②未熟な聴き手は母語知識に頼って目標言語を理解しようとすることや、聞き取れた情報をそのまま記憶しようとする、表現しにくい単語を回避しようとする、ことに対する意識が高い。③未熟な聴き手は情報を頭の中にイメージし、さらに記憶や理解を深めることに対する意識が希薄である。

課題Ⅱ：「聴解ストラテジーの使用実態の相違点」では、①熟達度が高いほど、正答率がテキストタイプに影響されにくく、熟達度が低いほど正答率がテキストタイプに影響されやすい。②再生言語は再生率に影響を与えず、母語の再生率が高くなるほど、第二言語の再生率も高くなる。③説明文の方が物語文より理解しやすいが、熟達した聴き手はテキストタイプに影響されず、説明文でも物語文でも理解に支障はない。一方、未熟な聴き手は、物語文になると聴解理解に困難が生じる。④熟達した聴き手は聴解力と再話力の間で大差がないが、未熟な聴き手は聴解力と再話力に個人差があるため、聴解課題によって結果が異なる。⑤熟達した聴き手の方が未熟な聴き手より「問題特定」の件数が少なく、イメージや音を結び付けて内容を覚えたり、話題に関連があるものを連想したりする余裕があり、その結果として特定の箇所に注意を払うという情報の取捨選択能力が未熟な聴き手より高い。一方、未熟な聴き手は「問題特定」の件数が多く、語彙知識等によって推測しながら問題箇所を解決することに追われ、多くの時間・エネルギーを問題処理に費やす。その結果、イメージや音、関連話題等によって内容を覚える時間の捻出ができなくなり、テキスト全体の大意をつかむことができず、問題処理の段階にとどまる。

課題Ⅲ：「理解構築過程の相違点」に関しては、①熟達した聴き手では、問題箇所範囲が「単語レベル」と狭いが、未熟な聴き手では「単語レベル」が多いものの「広範囲の問題箇所（文レベル）」も少なくない。②熟達した聴き手のモニター範囲は主に「2IU以上」でモニター範囲が広いが、未熟な聴き手のモニター範囲は主に「単語レベル」と「1IUレベル」でモニター範囲が狭い。③熟達した聴き手と未熟な聴き手は「問題特定から推測への連鎖」という連鎖のパターンを共に最も多く使うが、未

熟な聴き手は「問題特定から推測への連鎖」に頼りがちである。一方、熟達した聴き手は使用した連鎖のパターンの種類が多い上に、問題特定をしてから、複数の聴解ストラテジーを用いることで、問題解決をする。④熟達した聴き手の問題箇所範囲は「単語レベル」で、モニター範囲は「広範囲」であり、ストラテジー連鎖を用いながら問題を解決し、理解成功率は4割台から5割台である。一方、未熟な聴き手の問題箇所範囲は「広範囲」が多く、モニター範囲は「単語レベル」で、問題解決の方略は主に「語彙知識による推測」、理解成功率は1割台に留まっている。また、熟達した聴き手は理解不可能な音節、修復が困難だと思う箇所、広範囲の問題箇所を未処理にすることが多いのに対し、未熟な聴き手は広範囲の問題箇所を未処理にするパターンも観察されたが、粘り強く解決することが多い。

「再話課題の有効性」についての4つの副課題の結論は以下の通りである。

- 課題 i : 再話課題は聴解力を測定することができる。特に習熟度が高い聴き手ほど、よりの確に聴解力の測定が可能となる。その上、正答率の結果から再生率の得点も予測できる。
- 課題 ii : テキストタイプによって、再生率が異なり、説明文の方が物語文より再生率が高い。また、登場人物同士のやりとりと行動の変化の場面が多いテキストの方が再生率が低い。
- 課題 iii : 再生言語は再生率に影響を与えない。また、第二言語で産出された情報内容と母語で産出された情報内容がほぼ一致している。
- 課題 iv : 習熟度にかかわらず、再生しやすい箇所と再生しにくい箇所に違いは殆ど見られない。また、情報の重要度に関係なく、「文頭と文末の部分」と「語彙難易度の低い名詞」が多く産出される。一方、「語彙難易度の高い名詞や動詞」、「物語文によく使われる名詞（羊飼、茨、棘等）」、「複合動詞」は再生困難な要素である。

今後の課題としては、(1) 既習語の発音に対する認知と調音への実態調査、(2) 理解時の理解構築過程への考察、(3) 今回の分析で割愛した中間レベルの聴き手の聴解ストラテジーに対する意識的使用・使用実態・問題処理時の理解構築過程への考察、(4) 日本語母語話者への調査、の4点を挙げている。最後に、日本語教育への示唆として、学習者の理解、精緻化推論の能動的な生成を促すために、物語文の導入の必要性を説いている他、本研究で体系的に分類された聴解ストラテジー、聴解ストラテジー連鎖の類型と理解構築過程のモデルを今後の聴解教育に活かしていくことを推奨している。さらに、習熟度が低い学習者に聞き取り上の問題に気付かせる方法として、再話課題を聴解授業に取り入れることも提案している。

【審査の概要及び評価】

審査は冒頭に審査員の紹介、主査による総評があり、続いて申請者から PPT を用いた論文概要の説明が約 30 分間なされた。それに引き続き、各審査委員と申請者の間で活発な質疑応答が行われた。公開審査の後、審査委員会で意見交換を行い、最終判断を下した。

具体的な審査の概要は以下の通りである。

審査委員によって指摘された本研究の主な長所は以下の通りである。

- ・従来、記述が中心であった第二言語学習ストラテジーの分野において、非対面聴解における理解構築過程にまで踏み込み、複数の調査における大量のデータ分析を通じてその解明に挑んでいる。また、熟達した学習者と未熟な学習者の学習ストラテジーの違いを明らかにすることで、学習ストラテジーの発達段階があることを示唆する結果を得ており、実践面だけでなく、第二言語習得の理論面にも貢献しうる内容を含んでいる。
- ・熟達した学習者と未熟な学習者の比較においては、学習ストラテジーの種類に比較に力点が置かれていた従来の研究に対し、本研究ではストラテジーの連鎖（組み合わせ）、モニター範囲にも目を向けている他、テキストタイプ（説明文、物語文）によっても難易度が異なるなど、聴解ストラテジー/学習ストラテジー研究における新たな知見を数多く提起している。以上の点から、独創性、新規性に富み、学術的価値の高い研究といえる。
- ・本研究は、土台となる 4 つの準備的調査と、その結果をふまえ実施された本調査から成るが、いずれも台湾で実施されており、データ収集及び再話・回想法のプロトコルの文字化や分析も含めて、一連の調査の実施とデータ分析に多くの時間と労力を費やし、またその膨大なデータに加えた質的・量的分析結果を詳細に記述している。その全てをまとめた論文（443 頁）は実質的で読みごたえがあり、申請者の研究者としての力量と並々ならぬ努力・熱意が感じられる。
- ・本調査では、再話・回想インタビューとプロトコル分析という定性的手法を用いつつも、その分析には統計的手法も駆使した定量的分析を併用しており、調査手順と分析基準等の明確かつ詳細な記述を通じて、調査結果の妥当性、信頼性を高めるための多大な努力が払われている。また、分析結果や構築されたモデルを図式化するなど視覚的にも分かりやすく提示する工夫が認められる。
- ・先行研究から調査の概要、研究結果、考察、結論に至るまで、しっかりとした明確で詳細な記述がなされており、文章、図表なども概して明瞭である。
- ・王氏自身が台湾の出身であり、本研究の対象者である台湾の学習者を取り巻く文脈を熟知し、彼らの母語によって再話・回想インタビューを実施している点は、本調査の結果の妥当性を高めるものとして評価される。本研究で得られた成果は、台湾における学習者の日本語教育の実践面にも貢献しうる示唆を多く含んでいる。

以上のように、申請者の長年にわたる熱意と粘り強い努力が十分に伝わってくる労作である。

一方、各委員から指摘されたコメント、疑問点は以下の通りであった。

・本研究は、聴解ストラテジーの意識的使用、使用実態、理解構築過程の3つの大きな課題と、再話に関する4つの副課題を設けており、そのために4つの予備的調査と本調査を実施しているが、最初の3つの課題がどの調査結果に該当するかといった、研究のグラウンドデザインが初めての読者にはやや把握しにくい。

・本研究では、熟達者と未熟者の二者を比較しているが、その中間レベルの学習者についてはあまり触れられていない。また、母語話者との比較も行われていない点が残念である。今後は中間層、母語話者にも調査をすることで、第二言語習得におけるストラテジーの発達過程をより包括的に理解するよう、努めてほしい。

・本研究では文字情報を伴わない非対面聴解という限定的な聴解活動を扱っている。教育場面での聴解活動を扱うという主旨は理解できるものの、日常場面の聴解活動としてはやや特殊なものであることは否めない。今後は文字情報を伴う聴解も含めてより日常的な聴解タスクにも範囲を広げていくことで、より包括的な聴解の理解構築過程の解明につながるであろう。

・本研究では、理解確認の手段として「再話」を採用し、あくまで文字情報を除外した方法を用いているが、これ以外にも「要約」のように文字を伴う方法もある。後者の場合には視覚に頼る学習者と聴覚に頼る学習者の間により大きな差が出るのが経験的に分かっている。今後は「再話」だけに限らず、「要約」などの方法も採用することで、学習者の個人差要因の影響も探究していくとよいのではないか。

・申請者は、教育的提言を行うことを本論文の目標に掲げ、熟達者と未熟者の比較を行っているが、本文ではストラテジートレーニングの問題は触れられていない。熟達者のストラテジー連鎖のレパートリーは未熟者にトレーニングすることに意義があるが、モニター範囲については学習者の文法能力によるところが大きく、熟達者の方法を未熟者にそのまま適用できない可能性がある。本研究の結果はこのような教育的示唆を他にも多く含んでおり、もう一度結果を精査して今後教育に活かして欲しい。

・熟達者と未熟者の比較を通じて聴解ストラテジーの発達段階を示唆している点は評価できるものの、未熟者がどのようにして熟達者になるかという第二言語習得過程についての理論化が不十分である点が残念である。多くのデータの多角的な分析結果が提示されており、今後はこれらの題材から考察し理論化を目指してほしい。

・熟達者/未熟者の二者の差異に注目するあまり、それ以外の個人差要因の考察は盛り込まれておらず、今後の課題でも触れられていない。ワーキングメモリの差や学習スタイルなどの影響も含めて、今後引き続き検討して欲しい。

・数量的分析及び統計的手法を用いている点は評価されるものの、その手法の妥当性や結

果の解釈に疑問がある部分が見られる。例えば、評価者内信頼性を求めるにあたり Cohen's Kappa 係数を用いているが、これは本来的には評価者間信頼性を求める際に用いられる手法である。また、再話におけるアイデアユニット (IU) の高再生群と低再生群の分類にクラスター分析を用い、3 グループに分類しているが、生成された樹形図では 2 グループに分類できると見られるものもあるなど、提示されているデータと結果の解釈が一致しない部分も見られる。

これらの指摘は本研究の意義を損なうものではなく、むしろ今後のさらなる発展のための激励や助言と捉えられるものである。審査委員からの問いかけやコメントに対し、申請者からは的確な洞察と解釈が示された。指摘された問題点を自覚的に真摯に受け止め、今後の研究に反映させていく姿勢も窺われ研究者としての今後の発展と活躍が期待された。

以上のことから、総合的に判断した結果、審査委員会は全員一致で、申請者に博士（学術）の学位を授与するに値すると結論付けた。